

巻頭言



「未来かなえネット」の現状と課題

気仙医師会 会長
(未来かなえ機構代表理事)

滝田 有

JRの「みどりの窓口」。今は当たり前前の発券システムだが、旧国鉄での発足時は重複発券などで散々だった。それが変貌を遂げたのは、ベンダーの開発現場にユーザーの国鉄職員が数十人で参加し、実地に使えるように改良を加えたからだ。未来かなえネットも正直、「みどりの窓口」発足当初に近い。旗振り役の私でさえユーザーとして愕然としたことが何回かある。その都度ベンダーに伝え改善させた。

昨年、機構の事務局がユーザーにアンケートを行った。現状では有効に使えていないという実感がある反面、将来有効になる筈という期待感もあることが分かった。医師が主に考えるのは病診連携だ。将来性のあるプラットフォームを我々は手に入れたが、そこに何を積み上げていくかは我々自身にかかっている。使えないから使わないのではなく、使えないのを使えるようにする意志が大切だ。気づいたことはこまめにベンダーに伝えてほしい。理事会や社員総会でも積極的に発言、提案してほしい。

ネットワークには病診連携以外の利用もある。二つの県立病院のクリティカルパスの様式を統一しデジタル化を目指している。これは介護や福祉分野の方々には朗報である。アドバンスケアプランニング（ACP）での意思表示や、救急車からの12誘導心電図の転送なども近い将来実現する。各種健診データの取り込みや母子手帳のデジタル化、新しいタイプの訪問看護ステーションによる自律的利用など、夢は広がる。

未来かなえのようなネットワークは全国に270ほどあるが実働しているのはその1割に過ぎない。我々は気仙広域環境未来都市事業の一環として始めたため3市町の全面的バックアップを得ている。また当初からリプレース費用を積み立て、持続性を考慮している。さらに行政の協力と草の根の勧誘活動が相俟って、住民加入率（加入者数を域内総人口で割った値）は15%に達している。他のネット（多くは1～5%）に比べて格段に高い。平成30年度は総務省の高度化事業にも選ばれ、両磐地区の有志と繋げることが出来た。

最後に皆様に一言。カルテを是非ネットにアップしてほしい。レセプトだけでは臨床像を掴みにくい。私の電カルはSS-MIXIIに対応せず開示が出来ないのが残念だ。堂々と開示できるカルテの記載を心がけよう。レセプトデータだけでは将来のビッグデータによる医療政策の決定にも禍根を残すだろう。